

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00015

研究課題名（和文）世紀転換期の英米哲学における観念論と实在論 現代哲学のバックグラウンドの探究

研究課題名（英文）Philosophy in British and America on Idealism and Realism at the Turn of the Century

研究代表者

染谷 昌義（Someya, Masayoshi）

北海道大学・人間知・脳・AI研究教育センター・博士研究員

研究者番号：60422367

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、世紀転換期の1880年代から1930年代の約40、50年間に英国と米国で興隆した实在論哲学からの観念論への批判と論争を探り、英米哲学の哲学的バックグラウンドを明らかにすることにある。連携研究者・研究協力者8名それぞれが研究対象とする一次資料・二次資料を丁寧に読み込み、定例研究会にて発表と検討を重ね、最終年度にそれぞれの成果を電子書籍にまとめ、インターネット上に無料公開した。定例研究会で検討した内容のいくつかは関連学会や学会誌でも発表された。研究期間はコロナ禍と完全に重なったためオンラインでの議論に終始したが、調査すべき資料が多数ある中、この領域の研究の先鞭をつけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の英米哲学の淵源には、世紀転換期の实在論運動（観念論に対する批判と实在論哲学の興隆）があった。これは哲学史的事実としては知られていても、实在論側の批判や主張の具体的内容は本邦ではほとんど知られていない。唯一まとめて日本語で読めるのは、大島正徳『現代实在論の研究』（1943年）のみ。本研究は、少なくとも本邦では未踏である哲学史の領域に踏み込み、哲学者たちの主張と論争の内容を当時の文脈で明らかにし、新たな研究領域を発掘する点に意義がある。加えて本研究は、哲学史を紐解くことで、自覚なきままに束縛される現代の哲学的思考のパターンを相対化し、思考に自由を取り戻す役目を積極的に負った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of our study is to explore the controversy between idealism and realism in philosophy in Britain and the United States at the turn of the century, during the roughly 40-50 years from the 1880s to the 1930s, and to reveal the background of contemporary Anglo-American philosophy. During the research period, each of our eight collaborating researchers carefully read the primary and secondary literatures of their interest and made presentations and discussions at regular research meetings. We compiled our findings into an e-book at the final year of the project and released it on the Internet free of charge. Some of the topics discussed in the regular meetings also have been presented at related academic societies and journals. The research period completely coincided with the time of COVID-19, so all the discussions were only online. Though there is a large amount of material to investigate, we seemed to be able to get a head start in this area of research.

研究分野：哲学

キーワード：实在論 観念論 世紀転換期 英米哲学 哲学史 新实在論 批判的实在論 英国实在論

1. 研究開始当初の背景

20世紀以降から現代につらなる哲学の潮流のうち、マルクス主義哲学を除く、プラグマティズム・現象学・分析哲学の源流には、観念論哲学への批判と实在論の主張があったことは、たとえば Chisholm によるアンソロジエ (Chisholm, 1960) により知られている。de Waal (2001) によれば、实在論・反観念論の「復活」は、20世紀の初めに英国、アメリカ、大陸ヨーロッパ (ドイツ・オーストリア) に一般的に見られた現象であり、「大西洋の両岸で当時支配的であった観念論への反乱が大規模に展開した」(Ibid. p. xv) ものだった。

こうした哲学史的知識は共有されているが、実際にそこでどのような論争や批判がなされていたのかは、少なくとも本邦の西洋哲学の研究においてはあまり知られていない。戦前の大島 (1943) が本邦におけるほとんど唯一のまとまった研究である。もっとも、厳密に言えば、世紀転換期の個々の哲学者の見解や思想史研究は全くなされていないわけではない。よって、そうした単発で行われている研究を組織化し、それぞれの間にある有機的連関を時系列的に検討し、哲学者の主張同士の対立関係や影響関係や親近性を地図として描くことがこれからの研究では必要となる。

海外では、分析哲学の歴史考察やプラグマティズムの哲学史研究が盛んになるにしたがい、世紀転換期の英国観念論や Neo-Realism、New Realism を主題とする二次資料が出つつある。また過去の文献のデジタル・アーカイブ化が進み、一次資料を利用できる環境も整えられつつある。こうした研究環境を利用し、世紀転換期の英米哲学・思想を研究する者たちが分業して一次資料・二次資料の考査を行える機会が現実化した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀半ばから20世紀前半まで (およそ1880年代～1930年代まで) の約50年間を世紀転換期と見なし、この時期に英国と米国で興隆した観念論哲学、それに対する批判と論争、批判を支える实在論のさまざまな立場と主張内容を探り、1950年代以降現代に至る英米哲学の哲学的バックグラウンドを明らかにすることである。

先述した Chisholm (1960) によれば、世紀転換期の反観念論・实在論に共通するのは、知覚、信念、判断、思考といった認識作用・知的な心のはたらきが相手とする対象 (知覚されるモノや出来事、信じられた事態、真偽を判断された事態、思考された事態) は、具体的であれ抽象的であれ、個別特殊的であれ一般普遍的であれ、単純であれ複合であれ、さらには現実的、可能的、必然的、理念的であることを問わず、すべて当の心のはたらきから独立している (extra-mental, independence) というテーゼである。こうした広い意味での实在論テーゼを基礎にして、实在論の内部に心のはたらきの対象となるものの存在の意味をめぐって、また「心のはたらきから独立して」ということの意味をめぐって、さらに細かくさまざまな实在論の立場があった。

具体的には大きく三つの立場に分けることができる。①エドワード朝期 (1870-1916) とそれ以降の英国の反観念論の Neo-Realism 論者ら (G. F. Stout, J. C. Wilson, S. Alexander, P. Nunn, B. Russell, G. E. Moore, A. N. Whitehead)、②アメリカの W. James とかれの哲学を引き継ぐ New Realism 論者 (E. B. Holt, R. B. Perry, W. P. Montague など)、③G. D. Hicks や F. J. E. Woodbridge、そして New Realism への批判として登場した Critical Realism 論者 (D. Drake, A. O. Lovejoy など) である。

3. 研究の方法

(1) 文献考査の分業体制と知識・情報共有

实在論の各主張と論争点を一次資料・二次資料の丁寧な考査をとおして明らかにすることが具体的な研究作業となるが、対象とする資料が多いため考査作業は複数人による分業体制をとる。この方法は、まさに本研究が対象にしている1910年代のアメリカにおける New Realism や Critical Realism での「哲学のやり方」をモデルにしている。本研究に従事する8名の分担者・協力者は、各自が対象とする哲学者や文献を考査し、年間2回1-2日間かけて実施した定例研究会にてその結果を報告を発表した (研究期間はコロナ禍と重なり、多忙になった代表者の都合により、定例研究会の開催が減った年もあった)。その際、意見交換、議論、書籍や論文等の情報提供を行い、各自が有する知識や情報を積極的に共有した。

(2) 文献考査の方針

議論文脈が現代とは異なることを考量し、文献考査にあたっては以下の二つの方針を立てた。

① 認識論的問題をめぐるとる实在論／観念論批判

各哲学者の主張内容や論点を、認識論上の問題をめぐるとる観念論への批判という観点からまとめ、整理する。より細かくは、マスター・アーギュメント (存在の普遍的条件は認識・思考する心のはたらきへの依存性である) の妥当性、知覚経験される対象の直接性／間接性、性質 (二次性質、関係) の存在論的身分、をめぐるとる論争を軸に論点を取り出す。

② 哲学観・哲学へのスタンスの違い

各哲学者の主張内容と個々の論点を、哲学が課題とすべきこと、哲学へのスタンスの違いに着

目して理解する。世紀轉換機の英米哲学では観念論は批判されるだけだったわけではなく、19世紀に台頭した実証主義的特殊諸科学を批判的に吟味し、さまざま科学的真理の根拠と原理を問い、知識の規範を確立し体系化を目指す役割を担っていった。観念論は、科学的唯物論への異議や、霊的なもの（価値的なもの、宗教的信念）と知的なもの（科学的知識）との統一を試み、人文的・宗教的な価値と人間性の擁護から動機づけられていたと言える（R. W. Emerson, J. Royce など）。観念論と実在論との対立と論争には、人間が生きる知的・実践的環境の変化とそれに伴う世界観（人間観・自然観）の変化が反映されていることを念頭に置き、個々の主張の背後にある哲学観（役割観）に留意する。

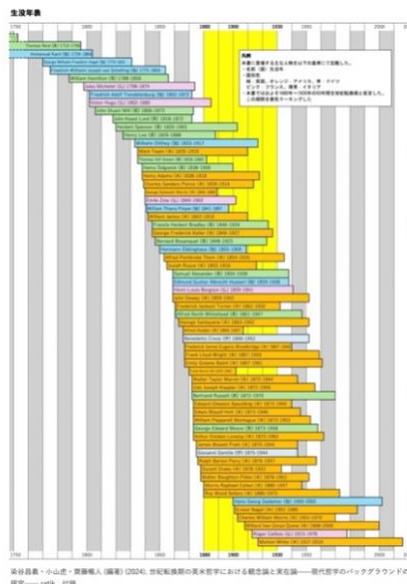
4. 研究成果

研究分担者（染谷昌義、小山虎、齋藤暢人）・研究協力者（有村直輝、伊藤遼、入江哲朗、大厩諒、岸本智典）の全8名による定例研究会（オンライン）、メール会議、クラウド上で論文や文献資料の電子共有、その他、個別のセミナーでの議論や意見交換を行い、各自の考査した内容のうち、検討を経て一定の形になったものは、アメリカ哲学フォーラムでのパネル企画「アメリカ哲学の再構築」（2020年度）、日本ホワイトヘッドプロセス学会でのシンポジウム「実在論をディグる」（2021年度）、関連学会誌に発表された。

研究期間中の定例研究会でテーマとして取り上げられた人物等を列挙する。英国関連では、B. Russell, G. E. Moore, G. F. Stout, Percy Nunn, F. C. S. Schiller, F. H. Bradley, J. M. E. McTaggart, A. F. Whitehead, C. D. Broad, B. Bosanquet, S. Alexander、アメリカでは E. B. Holt を筆頭に New Realism, D. Drake ら Critical Realism, W. James, J. E. Creighton, E. G. Spaulding, Josiah Royce, J. Dewey, G. Santayana, M. R. Cohen, F. J. E. Woodbridge, E. Nagel, F. Norris、ドイツでは E. Husserl, A. Meinong である（詳細は過年度の実施報告書を参照）。

研究期間を1年延長し、最終年度(2023年度)にはこれまでの各自の知識の蓄積を踏まえて論考を作成し、2024年3月21日に『世紀轉換期の英米哲学における観念論と実在論—現代哲学のバックグラウンドの探究』（染谷ほか編著（2024））としてまとめ、ウェブ上に発表した。この論文集は無料公開しており、誰でも参照とダウンロードができる。各論文で取り上げる哲学者や著作や論文はさまざまだが、いずれも観念論批判と実在論的主張に関連する。

右図は論文集の付録であり、所収論文全体で登場する人物（観念論、実在論の両陣営を含む）の生没年をまとめた年表である（詳細画像は <https://ratik.org/wp-content/uploads/IandR/appendix1.pdf>）。黄色マーキング部分が1880-1930年の50年間を表し、緑が英国の、オレンジが米国の人物である。多彩な人物が登場しているのだが、世紀轉換期の観念論と実在論の論争が、英国から米国へと舞台が拡張していった様子がわかる。実在論であってもさまざまな立場があることから、その主張内容の一つの特徴にまとめるのは困難だが、あえて強引にまとめるならば、認識論上の観念論（バークリー流の主観的観念論）



が英国で1870年代以降に復活すると同時に、Bradleyをはじめとする形而上学的な観念論が1890年代までに台頭し、この動向への抵抗として実在論運動が起こったと言える。世紀轉換期の実在論運動は、認識論的問題への自己主張のほか、反形而上学と親科学的性格・自然主義（物理学や生物学だけでなく心理学も含む）の側面も持ち合わせており（英国ではここに「常識」擁護が加わる）、特にその後のアメリカ哲学の動向を後押しする力があつたと考えられる。

最後に、代表者や分担者よりも一回り以上若い世代に属する研究協力者は、コロナ禍と重なった研究期間中も世紀轉換期の歴史に埋もれた哲学や思想の脈を発掘する作業を丁寧に進めていた。哲学史の研究の面白さは、今現在の自分たちの哲学的思考を相対化できる視点を身につけ、思考の自由さを取り戻せる点にある。本研究は、かれらとこうした哲学史研究の意義を共有し、今後の研究の軌を作り、今後続くこの分野の研究の地固めをした。本研究の大きな成果と言える。

<引用文献>

Chisholm, R. M. (1960) *Realism and the Background of Phenomenology*, Atascadero: Ridgeview Publishing Company.

de Waal, C. (2001) *American New Realism 1910-1920, vol. 1*, Bristol: Thoemmes Press.

大島正徳 (1943) 『現代實在論の研究』、至文堂

染谷昌義、小山虎、齋藤暢人（編著）(2024) 『世紀轉換期の英米哲学における観念論と実在論—現代哲学のバックグラウンドの探究』 特別非営利法人 ratik, <https://ratik.org/11290/907438647/> (無料ダウンロード可)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計45件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 23件）

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 6-1
2. 論文標題 色と延長	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央学院大学現代教養学部論叢	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ryo Ito	4. 巻 11
2. 論文標題 An Interpretation of the Gray's Elegy Argument	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal for the History of Analytical Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15173/jhap.v11i6.5380	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 有村直輝	4. 巻 31
2. 論文標題 ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について C・D・ブロード批判からの考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アルケー 関西哲学会年報	6. 最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 1
2. 論文標題 J・E・クレイトンの思弁的観念論 世紀転換期アメリカ哲学史（2）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アメリカ哲学研究	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 66
2. 論文標題 ウィリアム・ジェイムズ『真理の意味「プラグマティズム」続編』訳解(4)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 紀要 哲学	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 3626
2. 論文標題 [書評] ナンシー・スタンリック『アメリカ哲学入門』藤井翔太訳、勁草書房	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 实在論・観念論・パラドクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央学院大学現代教養論叢	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 5(2)
2. 論文標題 实在論の変容 アリストテレスからホワイトヘッドへ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央学院大学現代教養論叢	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koyama Tora	4. 巻 1
2. 論文標題 Analytic philosophy in Japan since 2000	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s44204-022-00046-y	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小山虎	4. 巻 55
2. 論文標題 マクタガートのA理論とB理論の成立経緯と「時間の空間化」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 科学哲学	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4216/jpssj.55.2_19	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 有村 直輝	4. 巻 22
2. 論文標題 T. P. ナンとホワイトヘッド	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32242/processthought.22.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤遼	4. 巻 45
2. 論文標題 ラッセルの見知りについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学世界	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 遼	4. 巻 22
2. 論文標題 外部世界をめぐる論争における観念論と實在論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32242/processthought.22.0_20	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大既 諒	4. 巻 22
2. 論文標題 新實在論の興亡 ベリー、スポールディング、ホルトを中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32242/processthought.22.0_35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大既 諒	4. 巻 65
2. 論文標題 ウィリアム・ジェイムズ『真理の意味「プラグマティズム」続編』訳解(3)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央大学文学部紀要 哲学	6. 最初と最後の頁 75-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 暢人	4. 巻 13
2. 論文標題 境界について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論理哲学研究	6. 最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 4巻2号
2. 論文標題 持続の複数性について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央学院大学 現代教養論叢	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 4巻1号
2. 論文標題 根本的経験論と現象学における関係の実在論 ジェイムズとフッサール	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央学院大学 現代教養論叢	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤遼	4. 巻 67
2. 論文標題 哲学史研究の越境と分業についてーある推論主義の立場から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 遼	4. 巻 2021
2. 論文標題 分析哲学のいわゆる「心理学的起源」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 67~78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11439/philosophy.2021.67	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 入江哲朗	4. 巻 15
2. 論文標題 現在性はたして恩寵なのか マイケル・フリード「芸術と客体性」のエピグラフをめぐる考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 102-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入江哲朗	4. 巻 53巻15号
2. 論文標題 フレデリック・ワイズマンとインスティテューショナルな笑い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 88-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 64
2. 論文標題 ウィリアム・ジェイムズ『真理の意味「プラグマティズム」続編』訳解(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央大学文学部紀要 哲学	6. 最初と最後の頁 67-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 21
2. 論文標題 書評 飯盛元章『連続と断絶： ホワイトヘッドの哲学』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 プロセス思想	6. 最初と最後の頁 169-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 30
2. 論文標題 思想史は私たちに何を教えるか ククリック『アメリカ哲学史』翻訳の経験から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 185-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暢人	4. 巻 3-1
2. 論文標題 内的関係説の形而上学的含意	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央学院大学現代教養論叢	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 63
2. 論文標題 「六人の実在論者による計画趣意書および最初の綱領」訳解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学 紀要 哲学	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大既諒	4. 巻 5-2
2. 論文標題 古典的プラグマティズム再考 共訳書紹介を兼ねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 140-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 入江哲朗	4. 巻 5-2
2. 論文標題 デイヴィドソンからローエル兄弟へ あるいはアメリカ哲学史とハーヴァードの切っても切れない関係について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 168-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 29
2. 論文標題 世紀転換期米国における教育史叙述の変容 ポール・モンローの教育史テキストに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 153-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本智典	4. 巻 5-2
2. 論文標題 子どもの道徳性はどこからくるのか 19世紀米国における超自然主義的有機体論を再考する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィルカル	6. 最初と最後の頁 154-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤遼	4. 巻 53-2
2. 論文標題 初期ラッセルの存在論における世界の十全な記述可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 科学哲学	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4216/jpssj.53.2_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計46件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 染谷昌義
2. 発表標題 アフォーダンスの心理学のラディカリティ サイコロジカルなことの科学への道
3. 学会等名 CHAIN ACADEMIC SEMINAR #39 (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Naoki Arimura
2. 発表標題 Speculation and Hypothesis: A Historical Investigation
3. 学会等名 13th International Whitehead Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 Reading "On Denoting" in Context
3. 学会等名 応用哲学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryo Ito
2. 発表標題 Russell's Notion of 'Genuine Names'
3. 学会等名 A Workshop on Russell, Lesniewski and beyond
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大庭諒
2. 発表標題 W・ジェイムズと汎心論の微妙な関係
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第10回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岸本智典
2. 発表標題 ジョサイア・ロイスの教授学論とその知的文脈 ハーバード教育大学院（HGSE）誕生前夜の哲学者たち
3. 学会等名 日本教育学会第82回大会（ラウンドテーブル11 アメリカにおける教師の専門性の史的変遷）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 齋藤暢人
2. 発表標題 偶然性について
3. 学会等名 論理哲学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小山虎
2. 発表標題 On the Reasons Why (Current) Robots Cannot Talk Like Humans
3. 学会等名 日本科学哲学会第55回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 有村直輝
2. 発表標題 ホワイトヘッドの「思弁哲学」の形成について C. D. ブロード批判からの考察
3. 学会等名 関西哲学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 ラッセルとウィトゲンシュタイン
3. 学会等名 科学基礎論学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryo Ito
2. 発表標題 Society for the Study of the History of Analytical Philosophy
3. 学会等名 An Interpretation of the Gray's Elegy Argument
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryo Ito
2. 発表標題 Russell and Wittgenstein on Facts and Complexes
3. 学会等名 Summer Workshop on Various Aspects of Wittgenstein's Thought
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryo Ito
2. 発表標題 Variables and Various Sorts of Disagreements about Rules
3. 学会等名 France-Japan Workshop on "Philosophy and Ethics of TV drama series" and "Disagreements in Logic and Reasoning"
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 入江哲朗
2. 発表標題 世紀転換期アメリカ思想史におけるタコの形象 フランク・ノリスとウィリアム・ジェイムズの共通項を探る
3. 学会等名 アメリカ学会第56回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 入江哲朗
2. 発表標題 オーストリアン・コネクション・イン・アメリカ? 小山虎『知られざるコンピューターの思想史』をめぐって
3. 学会等名 小山虎『知られざるコンピューターの思想史』研究会イベント(フィルカル)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 染谷昌義
2. 発表標題 知覚(経験)の哲学における実在論と観念論 世紀転換期における多様な発想
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山虎
2. 発表標題 マクタガートのパラドックスと觀念論
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山虎
2. 発表標題 マクタガートの「時間の非実在性」が哲学的時間論の古典となった経緯について
3. 学会等名 日本時間学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤暢人
2. 発表標題 觀念論とパラドックス
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 論理的原子論における「論理」と「原子」について
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryo Ito
2. 発表標題 Two Epistemological Problems in the Early Russell 's Ontology
3. 学会等名 Society for the History of Early Analytical Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 フレーゲのパズルとラッセルの存在論
3. 学会等名 存在論・形而上学ワークショップ・三田ロジックセミナー (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 ラッセルの「構成」概念とスタウトの心理学
3. 学会等名 日本ホワイトヘッド・プロセス学会第43回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 入江哲朗
2. 発表標題 ウォルター・ベン・マイケルズ「コーポレート・フィクション」再読 ジョサイア・ロイス論を中心に
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大庭諒
2. 発表標題 J・E・クレイトンの経験観 「経験の立場」(1903)論文を読む
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大庭諒
2. 発表標題 新実在論の興亡 ペリー、スボールディング、ホルトを中心に
3. 学会等名 日本ホワイトヘッド・プロセス学会第43回大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大庭諒
2. 発表標題 J・E・クレイトンの思弁的觀念論 世紀轉換期アメリカ哲学史(2)
3. 学会等名 アメリカ哲学フォーラム第8回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸本智典
2. 発表標題 デューイはジェイムズをいかに理解したか 1900年代までを中心に
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸本智典
2. 発表標題 アメリカ哲学史にとっての心理学 「実験心理学」の生成とそれへの批判
3. 学会等名 東京大学共生のための国際哲学研究センター (UTCP) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 有村直輝
2. 発表標題 ホワイトヘッドの「出来事」概念について：世紀転換期の観念論・实在論の文脈から
3. 学会等名 BAIR定例研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 有村直輝
2. 発表標題 T. P. ナンとホワイトヘッド
3. 学会等名 日本ホワイトヘッド・プロセス学会第43回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小山虎
2. 発表標題 形而上学的時間論の一方法論としての意味論：メタ形而上学的観点から
3. 学会等名 第6回時間言語フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大厩諒
2. 発表標題 世紀転換期のアメリカ哲学における観念論と実在論
3. 学会等名 日本哲学会臨時大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 入江哲朗
2. 発表標題 アメリカン・サイエンスとパラノイド・スタイル アメリカ科学思想史をジェディディア・モースから始めてみる
3. 学会等名 科学研究費・基盤研究(B)「メイフラワー・コンパクトにおける「排除／包括の理論」と環大西洋文化の再定位」定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤遼
2. 発表標題 分析哲学のいわゆる心理学的起源について
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 染谷昌義、小山虎、齋藤暢人、有村直輝、伊藤遼、入江哲朗、大厩諒、岸本智典	4. 発行年 2024年
2. 出版社 特定非営利法人ratik	5. 総ページ数 206
3. 書名 世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論 現代哲学のバックグラウンドの探究	

1. 著者名 岸本智典、今井康雄、小玉重夫、松浦良充、松下良平、ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 666
3. 書名 教育哲学事典	

1. 著者名 小山虎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 知られざるコンピューターの思想史 アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ	5. 総ページ数 368
3. 書名 PLANETS	

1. 著者名 岸本智典，行安茂（編著），和氣節子，山本孝司，船木恵子，高宮正貴，新茂之，西園芳信，中村和世，新井保幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 294
3. 書名 デューイの思想形成と経験の成長過程	

1. 著者名 大厩諒	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 152
3. 書名 経験の流れとよどみ	

1. 著者名 有村直輝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 生成の美と論理	

1. 著者名 日本デューイ学会（分担執筆 岸本智典）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 330
3. 書名 民主主義と教育の再創造 デューイ研究の未来へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究成果の論文集、染谷昌義、小山虎、齋藤暢人（編著）、有村直輝、伊藤遼、入江哲朗、大厩諒、岸本智典（著）『世紀転換期の英米哲学における観念論と実在論 現代哲学のバックグラウンドの探究』、2024年3月、特別非営利法人ratik は、<https://ratik.org/11290/907438647/> より無償で参照とダウンロードができる。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	齋藤 暢人 (Saito Nobuto) (70339646)	中央学院大学・現代教養学部・教授 (32505)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小山 虎 (Koyama Tora) (80600519)	山口大学・時間学研究所・准教授 (15501)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	有村 直輝 (Arimura Naoki)		
研究協力者	伊藤 遼 (Ito Ryo)		
研究協力者	入江 哲朗 (Irie Tetsuro)		
研究協力者	大厩 諒 (Omayo Ryo)		
研究協力者	岸本 智典 (Kishimoto Tomonori)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関